

校長だより

平成25年7月19日(金)

第7号

浦添高等学校校長 高安直

言葉の力が光る 第43回校内弁論大会

7月17日(水)那覇市民会館で校内弁論大会を実施しました。

この行事は、日頃の体験を通して、自らテーマを見つけ、高校生の視点で考え、自分の言葉で表現し発表する。この気づく、考える、文章を書く、スピーチをする、という一連の学習を通して、高校生としての知性の向上を図ることをねらいとしています。

また多くの生徒が、弁士の主張に耳を傾け、人それぞれ多様な価値観があることに気づき、その考えを知ること、自己をしっかりと見つめ、より主体的で豊かな学校生活が送れるようにすることもその目的の一つです。

最優秀賞	知念志帆 (3-5)	「信じること」
優秀賞	島袋義貴 (3-6)	「意見」
	田村若葉 (1-9)	「意見」
優良賞	名嘉みらい (2-9)	「大切なこと」
	砂川七々海 (3-9)	「脱衛星化への一歩」
	仲田弘大 (2-10)	「男女平等について」
	フォーマン紫音 (3-3)	「悔しい思い」
	安仁屋利緒菜 (2-5)	「方言を伝えていくために」
	諸見琴乃 (1-1)	「健常者と障害者」
	吉浦未邦 (1-7)	「働く子供たちについて」
	知念委吹 (2-1)	「偏見について」
	照屋規真 (1-4)	「自分の気持ち」

※ 最優秀賞の知念志帆さんは、9月に行われる「沖縄県高等学校総合文化祭 弁論部門大会」に学校代表として参加します。

「自分は何者」葛藤を言葉に



西原さんは本校四十五期生です。おめでとございます。

「詩集はお世話になった方々への恩返しになろうと思った」と語る、第36回山之口獬賞を受賞した西原裕美さんは6日、那覇市天久の琉球新報社

度、第7回おきなわ文学賞詩部
「詩集を出すに当たって、お世話になった方々への恩返しになろうと思った」。詩集「私でないもの」で第36回山之口獬賞を受賞した西原裕美さんは、受賞の知らせに戸惑いながらも、初めての詩集が高く評価されたことに、笑顔で感謝の思いを語った。

浦添高校3年生だった2年前、小中高校生を対象にした第9回「神のバトン賞」(主催・琉球新報社)の高校生部で正賞に輝いた。神のバトン賞受賞者が、後に山之口獬賞を受賞するのは初めて。

当時から、みずみずしい感性は選考委員に注目されていた。バトン賞を受賞したとき、「いつか詩集を出したい」という思いが湧いてきたという。同年

山之口獬賞・西原裕美さん

現在は20代、30代の詩人たちがつくる同人誌「1999」で詩を発表している。「これからは無理して書かない。降ってきた言葉の方が書きやすい」

選考会では「感覚が痛々しい。皮膚感覚を超え、内臓感覚で書いている。日本にいる二十歳でこれだけ書ける人がいるのか」と評された。

詩を書き始めたのは小学3年生から。「最初は親に褒められて何となく書いてきたことが、生活の一部になってしまった」という。

念願の詩集、評価に笑顔

二〇一三年七月九日 琉球新報

「信じること」

最優秀賞 知念志帆（3年5組）

「分かりました。信用しているのです。」

私は高校一年生の時に、県が主催している現代版組踊の舞台に参加していました。しかし、部活動の大会と舞台が重なっていたこともあり、毎回の舞台の練習には参加できないかもしれないと演出家の先生に話したところ、この一言が返ってきました。

「それならば、舞台は諦めるべきだ。」といわれても仕方がないと覚悟していた私は、驚いたのと同時に、その言葉に救われた思いがして、涙があふれてきそうでした。今にして思えば、その一言があったからこそ、それを支えに私はどちらも全力で取り組めたのだらうと思います。この「信用している」「信用されている」という気持ちがお互いにあったからこそ、先生は私を舞台に上げてくれたし、私もしっかり舞台をつとめ上げることを決意し、日々の練習に励むことができたのです。

そして、この事の他にも「私は信用されているのだ。」と感じた出来事がありました。それは部活動に専念するため舞台の活動を辞めてしばらくのことでした。所属している空手道部の顧問である宮城敏也先生に、中国で開催される日中国交正常化四十周年の祝典に参加してみないかという誘いを受けました。そこでまず私は、先生が勧めてくれたことが意外でした。本来なら大きな大会が控えていたこともあり、顧問としては部活動に専念してほしいはずなのに、きっと私のことをあらゆる方向から色々考えて勧めて下さったんだということが嬉しくて、それならば私はこの期待に応えるためにも私の持っている力を十分に発揮して、中国の舞台で思いっきり楽しんでこようと考えました。しかし、その時期の日本と中国は、尖閣諸島の国有化問題の真っ只中にありました。この状況の中で私たちは中国に心からの想いを伝えられるのか。そもそも日本人である私たちを受け入れてくれるのだろうかかと本当に不安でしたが、大きな問題を抱えている今だからこそ、私たちにできることは必ずあるのではないかという気持ちで、参加することになりました。

心を尽くして精一杯の演技を披露し、三日間の祝典が終わりました。最後は中国人も他県から来た日本人も一つになって皆でカチャーシーを踊りました。気づけばそこには国の壁はありませんでした。言葉が通じなくても中国の人々が笑顔になって踊っているのを見ると、気持ちが通じ合えた気がしました。

しかし、その願いもむなしく、帰国してそんなに日がたたないうちに、中国本土では反日デモが起きました。日本企業の建物やビルの無残な様子をニュースで見たとき、もしこれが私の滞在していた時期と重なっていたらと思うと怖くなりました。祝典の祭りのあの会場全体が一つになった感動は跡形もありませんでした。同じ場所だとは思えないほど、私の見た中国とは違っていました。そしてその時初めて、数回の交流くらいでは変わらないほど日本と中国にある溝が深いことを思い知らされた気がしました。

いつから日本と中国はこのような状態になったのでしょうか。デモがあったのは九月の下旬のことです。調べてみると、当時日本の首相であった野田総理が尖閣諸島の国有化を宣言した七月七日が、北京郊外の盧溝橋で衝突し日中戦争が起こるきっかけとなった盧溝橋事件があった日だったそうです。あれから数十年たった今でも、日本と中国はその問題を含めて様々な場面で対立が続いているのです。

ではどうしたらこの二つの国が信頼関係を結べるようになるのか、そこまで考えて、私は自分の姿を思い浮かべてみました。常日頃から私は信頼している人に気持ちを返しているのか、考えてみると私自身、それを素直に表していないと気づきました。普段から支えてくれている家族や友達、お世話になっている先生方に、感謝の気持ちをきちんと相手に伝えてこそ、信頼関係は成り立つのだと思います。

日本と中国の問題も、きっとその努力が足りないのだと思います。自分自身の身近な問題も、国と国との対立という国際的な大きな問題も、実はこんなに簡単なことなのかもしれません。私に足りないものは、相手に信頼していると気持ちを伝えることです。私に”信頼”を示してくれる人たちに、私も言葉や行動でそれを表現し、伝えていきたいと思っています。中国と日本の問題も結局は人と人とのつながりです。お互いを尊重し、心からの信頼を示すことで解決の糸口が、きっと見つかるはずです。その小さな懸け橋になるために私もまずは相手を”信じること”から始めてみようと思います。